

どのようにしてフットは悪を「人間の欠陥」と見なすのか

壁谷彰慶（千葉大学）

フィリッパ・フット (Philippa Foot) の *Natural Goodness* (2001) (以下丸括弧の数字は本書ページ数) 後半部において扱われる「悪」と「幸福」の関係を考える。

徳の理論 (徳倫理) を提唱してきた彼女は、本書で、徳を人間の自然本性の発揮として理解する試みを行っている。徳の理論は一般に、徳の根拠を徳原理によって与えることには反対し (反原則主義)、人間の特性によって与える立場である。行為の「善さ」や「正しさ」は、人間の特性の善し悪しのことがらとされ、「善い (正しい)」行為は「善い人がなす行為」として考えられる。

本書におけるフットの独自性は、この見解を、動物や植物と連続的なかたちで、人間の自然本性によって根拠づける点にある。果実をつける樹木、擬態する昆虫、8の字ダンスをするミツバチ、群れを成して狩りをするオオカミなどを考えよう。もしそれらのうちで当該の機能 (function) を適切に発揮しない (できない) 個体があれば、それを「欠陥をもつ」と見なすことに抵抗はないだろう。というのも、その個体の本来あるべき「生の形 (life form)」を実現しているか否か (自己保存と種の繁栄のために必要な機能を発揮しているか否か) が、その個体にとって重要であるとわれわれは考えるからである。本書でフットが試みるのは、こうした動植物の機能と類比的に人間の「実践的合理性 (practical rationality)」を理解し、同時にそこから徳理論的説明を提示することである。彼女によれば、実践的合理性は、人間の「幸福」という目的——それは動植物にとっての「自己保存」と「種の繁栄」という目的と連続的ではあるが、異なるものとして理解されている(51)——にとって必要な機能であり、実践的合理性を「理性的な意志 (the rational will)」(72)によって発揮することが、人間の本来のあるべき「生の形」に適った「善い (good)」あり方である。逆に、こうした傾向性を欠くことは、「意志に関する欠陥 (volitional defect)」(76)であり、「悪い (bad)」あり方とされる。

これは大まかな筋書きであり、彼女の慎重な筆致を汲み尽くせていないが、もっか注目したいのは、道徳的な「悪・不正 (wrong, wicked, evil)」の位置づけである。彼女の見解に従えば、「善さ」と同様に、「悪い (不正な) 行為」は「悪い人がなす行為」と理解され、本書の一つの主題として、そうした「悪い人」を、人間の自然なあり方に反する「欠陥をもつ」人として描写することが目指されている (「私は道徳的悪 (moral evil) が一種の自然的な欠陥 (natural defect) であることを示したい」(5))。だが、「欠陥をもつ」という評価を人間に適用する場合、動物や植物の場合と異なった難しさが生じる。

たいていの人がふつうに行うことをなす能力を生得的な疾患により喪失している人について、「欠陥をもつ」をいう表現を適用することは拒まれる。その点はフット自身も配慮している。だがすると、そうした適用を排除しながら、道徳的に悪い (不正な) 行為をする人や、道徳的に善い (正しい) 行為をしない人に対してのみ、8の字ダンスをしないミツバチと同じく「欠陥をもつ」と評価することがどのようにして可能かが疑問になる。

また、「悪」を「意志に関する欠陥」としても、「人間としての欠陥」に直に結びつかないように思われる。次のような指摘があげられるだろう。「悪」の追求を生涯の目的とし、

実践的合理性を発揮して行為に至る人物は、幸福の追求のために人間固有の機能を意志によって働かせたのだから、人間として「善い」あり方をしたとも言えるのではないだろうか（状況を踏まえて推論をし、相応の手筈を整えてうまく仕事をやり遂げた泥棒が、その目的を無視すれば、「よい」泥棒であるのと同様に）。何より、悪人にとっては悪の実現こそが「善い」ものであるはずである。そのとき、彼は「欠陥をもつ」とは言えないように思われる。だが、フットは、「悪人も得るような単なる満足は「善い」ものではない」(91)と述べ、「欠陥」視する。

ここで彼女が「道徳的客観主義」を標榜していること(53)や、「幸福」には感覚的な側面も重要だがその対象も重要であることを指摘していること(89)から察すると、前段落の問いに対するフットの（一つの）応答は、実践的合理性という機能のうちすでに「幸福の追求」という目的設定が含まれている、というものであろう。そうであれば、悪人の「幸福」は真の幸福ではなかったということになるだろう。しかし同時に、人間の「幸福」の中核を「利益 (benefit)」の観点からとらえようとしている(93)。すると、自らの利益のために「悪」をなす人が追求しているのは、「幸福」であると言う余地も残されるように思われる。

こうした疑問に十分に答えるかたちでフットは「幸福」や、それに関する基礎的な概念を本書の中では特徴づけていない（「幸福はさまざまな現われ方をする変幻自在の概念である」(97)）。そこで、どのようにして上記の問題を回避できるのかについて、彼女の議論を可能な限り再構成して考えてみたい。そのうえで、彼女の議論がどのような種類のものであるのかについて、私見を述べてみたい。（今のところ、われわれの現在の社会で営まれている道徳的実践の根拠を与えることを目指されてはいるが、それを正当化するところまでは目指されていない、と述べる予定である。）